

村山七郎氏の大野批判の実態

大野 晋

要 旨

タミル語 Kottai を、かさぶたに関係ある単語と解釈する大野説は、TL や Winslow の辞典の説明を誤解した、「創作的」で「奇怪」な見解であると、村山七郎氏は本誌133集に詳論した。しかし実は、Winslow の辞典には、

- ① Kottai の項には ‘Decay, rottenness, cariousness, blemish.’ (腐蝕・腐敗・カリエス・疵) と説明がある。
- ② 氏の引用部分の直前に、かさぶただらけの体を意味する合成語 ‘kottaiyutal A scabby state of body’ もある。

かように Kottai はかさぶたなど人体の疾病を直接指す単語で、氏の言う如き、布に関してだけ言う語ではない。氏が上掲の例に一言も触れないのは、氏が自分で Winslow の辞典を調べなかった結果か、或いはそこに記載されている事実故意に触れない作為である。氏は、本誌127集では TL を見ずに論じて誤り、再びかかる誤った(又は作為による)発言を繰返すために数千言を費した。

1

本誌133集において村山七郎氏は、タミル語 kottai の取扱いに

ついて大野の見解を批判し、大野の見解は「創作的」で「奇怪なもの」と書いている。ところが村山氏の主張を吟味すると次の諸点が明白である。

1. 氏は引用した Winslow の辞典を調べていない。
2. 或いは、氏は調べた結果を故意に曲げて報告した。
3. その結果として生じた、極めて初歩的な纏論を、氏ははげしい表現で記述した。

このような、他の研究者に対する批評において当然経るべき手続を踏みはずした議論に、学界誌の紙面を費すのは本意でない。しかし、日本語とタミル語の比較研究は、研究それ自体が、まだ初期の段階にあるから、やむを得ないこととして、以下に説明を加えることとしたい。

問題は kottai という単語の語義の取り方にある。

私は『国語学』130集で kottai に関する Tamil Lexicon の訳語をすべて掲げ、その和訳を併記した。その中に、

- (3) Fibrous rising on cloth, scab, scale.

とある項の、scab, scale を私は研究社の『新英和大辞典』(第5版)に依って『かさぶた。古くは膿疱・鱗癬を作る皮膚病。皮膚病による皮膚の薄片』と訳した。ところが村山氏は、『国語学』133集で、この scab, scale は、その直前の Fibrous rising on cloth (布に生じる繊維のダマ) についての比喩であって、病気そのものを指すのではないと主張している。その根拠は、その英語の後ろにタミル語で書いてある説明が「糸などの、布の表面に出ばったもの」とあるからという点にある。そして Tamil Lexicon が引用した M. Winslow の辞典の説明を引用し、もって大野がその部分を正しく

理解しなかったと論難した。つまり村山氏の主張は、kottai¹を人体の疾病に関係つけて解釈するのは誤りだということにある。

しかしこの村山氏の見解は無価値なのである。何故なら、氏が引用した M. Winslow の辞典の Kottai の項を見れば、Kottai が人体の疾病について使われることは一目で判明するからである。Winslow の辞書には、親項目 Kottai に四つの訳語がある。

Kottai Decay, rottenness, cariousness, bemish (腐蝕・腐敗・カリエス・疵)

ここにある cariousness は‘骨の腐蝕’である。つまりこれを見れば、Kottai が疾病に関することをいう言葉であることは議論の余地がない。この親項目の下に次の合成語もある。

kottaippal carious teeth (蝕歯・むしば)

さらにその下に次の合成語もある。これは村山氏の引用の直前にある単語である。

kottaiyūṭal A scabby state of body. (かきぶただらけの体)

これらを見れば、kottai が直接 (比喩ではなく) 人体の疾病、ことに、腐蝕とか、かきぶたについて使う言葉であることは明らかである。つまり村山氏の論評の如き、布に生じるグマだけを指すとする解釈は根拠がなく、誤りなのである。

では何故村山氏はこのような明白な誤謬をあえて主張したのであるうか。

参考のために私の使っている M. Winslow の辞典 ‘A Comprehensive Tamil and English Dictionary.’ Madras 1862. Reprint New Delhi 1979. Asian Educational Services. に見られる ‘kottai’ の項を掲出する。

கொத்தை, s. [vul.] Decay, rottenness, cariousness, blemish, கொத்தை.

கொத்தைநூல், s. Cotton yarn with particles of the pod adhering to it.

கொத்தைப்பல், s. Carious teeth.

கொத்தையாராய, inf. To examine cloth in order to pick out the particles of husk or pod.

கொத்தையுடல், s. A scabby state of body.

(Winslow の辞典 368 ページ末尾)

கொத்தையும்நெருடுமானசீலை, s. Inferior cloth, rough and having particles of the fibrous covering of the cotton woven into it.

(Winslow の辞典 369 ページ初頭)

村山氏は、見開きの右側の 369 ページにある kottaiyum neruṭu-māna cilai だけを引用して、左側の 368 ページの記載に一言も触れていない。しかし考えて見れば、左側 368 ページの親項目 Kottai Decay, rottenness, cariousness, blemish. を見ずに、369 ページの合成語の項目だけを見るのは、辞書の見方として極めて不自然である。従って推測されることは、氏が、見たはずの 368 ページの記載事項を故意に知らぬかのように扱ったか、或いは、自分自身でこの

辞典を調べなかったかのどちらかである（後の場合は、誰かにこの辞典を読んでもらったということになる）。

いずれにせよ、数千語を費して他人の研究を論難するに際し、①村山氏は、その辞書の当該の項目を自身で見なかった。（或いは故意に内容をゆがめて虚偽の紹介をした）。②村山氏自身は *kottai* に関して再び誤った判断をいだし、それを主張した。その二点は明白である。再びというのは氏が『国語学』127集で *DED* の説明の *scab, scale* を故意に省いて論じ、*kottai* を誤解したことがあるからというのである。

村山氏は、辞書のただ一箇所の訳語だけにかかわって *Kottai* を論じているが、単語の意味を考えるに当たっては、それと関連する単語について詳しく見て、全体的に把握することが必要である。そこで次に *kottai* に関連する単語のことを記しておく。

タミル語に多少の知識を持つものならばタミル語の語頭の *K* は *C* に転ずる例が少なくないことを知っている。従って *kottai* の意味を問題にするものは *cottai* を併せ見る。また *cottai* と同根の名詞形として *cotti* を併せ見る。これが常識である（村山氏はそれらのことをしなかった）。*Tamil Lexicon* を見ると、まさしくこの二つの単語が挙げられている。

Tamil Lexicon に明示してあるように *cottai* は *kottai* の転である。また *cotti* は *cottai* の転である。それぞれの意味を見較べればその間には少しずつのずれがある。しかしそれは *kottai* と本質的には連繫している意味である。*kottai* について *Tamil Lexicon* は次の7個の意味を区分した。それに、*cottai*、*cotti* との意味を考え合わせれば、*kottai* の根本的意味を把握するに役立つのである。

1. Rottenness (腐敗)
2. Blot, blemish, defect (汚れ, 疵, 欠点)
3. Fibrous rising on cloth, scab, scale (布に生じるダマ, かさぶた, うろこ)
4. Incompleteness (不完全・欠陥あること)
5. Blind man (盲人)
6. Spiritual ignorance (精神的な無教育, 無知)
7. Sinner (罪人)

kottai (n.<*kottai*)

1. That which is decayed, worm-eaten, injured by insects.
2. Defect, as in limbs, teeth, fruits, etc.
3. Being ruined in circumstances or character.
4. Emaciated person or animal.

(*kottai* から)

1. 腐蝕したもの, 虫の食ったもの, 虫に侵されたもの。
2. 四肢, 歯, 果物などにある疵, 欠損。
3. 環境や性格が崩壊しているもの。
4. 衰えやつれた人, 動物。

cotti (n.<*cottai*)

1. Lameness, crippledom, deformity.
2. Lame person.
3. Fault, negligence.

(*cottai* から)

1. 不具, 身体障害, 奇形。
2. 跛足の人。
3. 疵, 無視放置されること。

これと、Winslow の辞典における Kottai の Decay, rottenness, cariousness, blemish (腐蝕, 腐敗, 骨の腐蝕, 疵) などとを考えたとき、「布に生じるダマ」は kottai の中の特殊化された意味であることが明らかになる。

日本語の katawi または kattai は、癩人, 不具者, 愚者, 乞食の意味を持っている。私は少年の頃その不幸な病に侵された人々が、神社仏閣の門前で人々に金銭を乞うている光景を日常目撃していた。手足の指を失い、盲目となり、あるいは片足先をかかとまでなくし、汚れた包帯で臍を包んだ人々が、力無く横たわっていたものであった。日本ではこれを罪人と扱うことは無かったと思われる。その点がタミル語の kottai, sinner (罪人) との相違点であり、日本語の‘乞食’という意味はタミル語の辞典に掲げられていない。しかし私はインドで何度も見たのだが、私が少年時代に目撃したと同じように、この不幸な病気に苦しむ人が寺院の門前やバスターミナルで、汚ない包帯を手足に巻いて、金銭を乞うていた。あの kottai の人々を、乞食ととらえ、kottai の語で呼ぶことは、極めて自然であり、日本において kattai が乞食を意味するに至ったのは、根本において、同一であると思う。これらの考慮によって私はタミル語 kottai と日本語 katawi, kattai とを対応と見なすのである。タミル語の o と日本語の a との対応は OSC に挙げたように多くの例がある、またタミル語の -tt- と日本語の -tt- との対応については 130 集ですでに触れたのでここでは省略する。以上の手続を経て kottai に関する村山氏の解釈の誤りは明らかになったと思う。

次にタミル語 uraṅku と日本語 uragu との比較について述べる

ことにする。村山氏は、uraṅku を ur+a+ṅku と分析する K. Zvelebil の見解に従って、大野が日本語の urag-u とタミル語 uraṅku と対比していることを非難している。

タミル語の語根が (ドライヴィダ語一般としても) CVC- の形であることについては、大野もそれを承知しており、“Sound Correspondences between Tamil and Japanese”での取扱いにおいておよそそれに従っている。しかし実際にタミル語と日本語との比較を進めて行くと、接尾語をつけたままの形で日本語と対応する語例が存在する。例えば、この場合問題になる -ṅku という接尾語であるが、これがついたままの形で日本語と対応している例がある。実は村山氏が挙げている niṅku などがその例なのである。

uiṅkn の意味は、TL に次のように書いてある。

- tr. 1. To leave, go, depart, separate from. 2. To give up, abandon. 3. To pass over. intr. 1. To turn away, to be warded off 2. To be liberated, released. 3. To be dismissed, discharged. 4. To be excepted, excluded. 5. To go, proceed. (下略)

他動詞 1. 去る, 行く, 離れる, 分離する。2. あきらめる, 放棄する。3. 避けて通る。自動詞 1. 顔をそむける, かわす。2. 解放される。3. ふりすてられる, 免除される。4. 除外される, しめ出される。5. 行く, 前進する。

私はこれは日本語 nig-u (逃ぐ) に対応すると考えている。日本語 nigu には次の意味がある。

つかまらないように走って去る。離れる。避ける。身をかかわす。のがれる。

タミル語 ni は日本語 ni に対応し、タルミ語の -nk- は日本語の -g- に対応する。従って、niñku は日本語 nigu と対応する。

この場合 ni は、それだけで、

to separate from, abandon, leave, be removed

などの意味を持つ。しかし、その派生語 niñku でもって日本語 nigu と対応している。従って、urañku の場合、urañku 全体で日本語 uragu と対応すると見ることは何ら差支えないのである。

さて、この urañku の意味であるが、

to sleep, feel drowsy, be weary (眠る, 眠くなる, 疲れる) とあり、これはタミル語だけでなく、他のドラヴィダ諸語にも見られるものである。

マラヤラム語 uraññuka to sleep (眠る)

urakkuka to put to sleep (眠らせる)

カンナダ語 oraṅgu to be crooked, bent, rest, sleep

(傾く, 曲る, ねむる)

テルグ語 oragu to bend, bow down, lean (曲る, 傾く)

コダグ語 or- to fall asleep (眠りにつく)

これに対する日本語 uragu の意味について、従来は、

「うら」は心の意。愉快になる, よい心持になる, うき立つ

(日本国語大辞典)

のような意味とするのが大部分の見解であり、辞書の類もそう扱うものが多い。『岩波古語辞典』も「心が浮き立つ。ほがらかになる」という訳を与えている。

しかし実は、この言葉は従来、確定的には意味が分っていない言葉なのである。『時代別国語大辞典 上代篇』は、「心が楽しくなる

意か」と疑いを残して書いているし、私自身『岩波古語辞典』の原稿を作るとき、疑いを懐きながら従来の説に従わざるを得なかったのだった。

ところがウラグとは、「眠くなる, 眠る」という意味であろうと考えるならば、用例について統一的に今までよりもよい理解が得られるように思われる。

ウラグの用例は管見に入るところ三例である。

①もと難波宮に坐しましし時に、大嘗に坐して、豊の明りする時に、大御酒に宇良宜^{ウラノヨシ}て、大御寝坐しき。(「大御酒に酔って、眠くなり、ぐっすり眠ってしまった、天皇はここで眠りこけてしまった結果、大殿に火をつけられたことも知らず、タチヒ野ではじめて目がさめたのだった。)(古事記履中)

②故、この須須許理^{ススノコト}、大御酒を醸みて献りき。ここに天皇、この献れる大御酒に宇羅宜^{ウラノヨシ}て、御歌はしけらく、「すすこりが醸みし御酒に、我酔ひにけり、ことなぐし急ぐしに我酔ひにけり」(この献った大御酒で、眠くなって歌を歌われた。「すすこりの作った酒に、我はすっかり酔ってしまった。)(古事記応神)

③大神、大穴持命の御子、阿遲須伎高日子命、御須髪八握生ふるまで、昼夜哭き坐して、辞通はず。その時に祖神、御子を船に乗せて八十嶋を率て巡り宇良加志給^{ウラノヨシノミ}へども、猶哭き止まず。(アヂスキタカヒコネの命が、昼夜泣き通しに泣いて、言葉が通じないので、祖神が、御子を船に乗せて八十嶋をつれて巡り眠らせようとしたけれども、それでも泣き止まなかった。)(出雲風土記仁多郡)

以上三つの日本語の例のうち、③の如きは「氣を浮き立たせる」

のではなくて、「気を静める」とあるべきところで、このように「眠らせる」の意と見て、タミル語 *urañku* (眠くなる, 眠る) を考慮に加えて解釈する方がよりよいと見るのである。

もつとも、日本語ウラグの例は以上のように僅かしかないので、その意味を確定することが困難である。従って、もっと数多くの用例が発見された時に語義が確定され、対応についても明確な判断が可能となるものであると思っている。ただし、語形の対応については問題はない。

なおこの他、村山氏が、明確な根拠を挙げずに、異論めいた記述をせられているものがいくつかあるが、批判として公表する以上、確かな根拠を提示し、当然参考すべき関係事項を参照の上で述べることを希望する。それを待って早見を重ねて表明することとしたい。

——学習院大学教授——

(昭和58年8月19日 受理)